☆時の話題☆

脚光浴びる有明海の砂鉄

今年になつて急に有明海の砂鉄のことが賑やかな話題となつてきた。それもそのはず、これまで見かえるものもいなかつた海底に沈んでいるドベから、現代の基幹産業になくてはならない鉄がとれるというのだから、考えようによつてはたいへんなことだ。いつたい脚光を浴びた有明砂鉄というのはどんなものだろうか……

十五万年間の蓄積

阿蘇山が噴火したのは五百万年前ということになつている。その後、いまの有明海が陥没したのが十五万年前。

爆発したとき、熔岩にふくまれていた鉄分が火山灰とともに、白川や菊池川や緑川の流れに乗つて川を下り、有明海に沈澱したのがいわゆる「有明海の砂鉄」である。

阿蘇山から噴き出して川を流れて海に注いだもののうち火山灰のように比重が軽いものは、風による波浪で北の福岡県や佐賀県側に吹きだまり、荒尾から宇土半島北岸の、有明海の南地区には、重い砂鉄が沈んだわけだ。

なにしろ、有明海は袋状になつており出口はわずかに三角～島原をつなぐノド首のところだけで、砂鉄の溜り場としては、うつてつけのところということができる。

千本槍の原料

「日本刀は砂鉄でつくつた。砂鉄で特殊鋼を。」これが、有明砂鉄開発のキャッチフレーズになつているのをみてもわかるように（「有明海の砂鉄開発と製鉄所の誘致について！」――から）日本刀は砂鉄を原料にしてつくつたものである。

阿蘇山から噴き出した砂鉄も、いまから千年も前から刀剣の鍛造に使われ、有名な菊池の千本槍や、肥後の名刀〝胴田貫〟なども、この砂鉄が原料だつたという。

火山から噴き出した砂鉄には、チタンがふくまれているので質が堅く、必然的に切れ味がよいので、刀匠たちが古くから目をつけたわけであろう。

埋蔵量三千万トン以上

昭和三十二年の秋に、熊本市本山町に西日本鉄鋼株式会社（社長池田弘氏）ができた。小じんまりした電気炉をすえて白川下流から砂鉄をとる月産五百トンの鉄鋼会社であつた。

ところが、白川をあんまり掘りくりかえすと洪水のとき困る、との異議が出たため、川から海に採取の地域をひろげざるを得なくなつた。そこで新天地を求めて三十四年有明海の潜水調査をはじめた。これが三千万トン以上の砂鉄がある〝宝庫〟を探りあてたはじまりである。

もともと、海底の砂から鉄を探す場合の着磁率（磁石をつつこんで鉄がつく率）は五％そこそこというのが常識となつている。ところが、有明海の着磁率は七％から一〇％という高率で、もちろん企業として十分ソロバンに乗るものであることがわかつた。

そこで西日本鉄鋼では早速、親会社の八幡製鉄に相談をもちこんだ。

八幡製鉄は世間でよく知られているとおりの大製鉄である。鉄のコスト引き下げをねらつて、北は北海道から南は九州まで、全国的に「未利用鉄資源」を開発するところはないかと、ウの目タカの目で探しまわつているところだつた。鉱区権を設定、調査費二億円という大がかりなものである。

報告をきくとヨコ手をうつて喜び、急いで本格調査に乗り出したわけである。

そしてさる三月一日には西日本鉄鋼株式会社を発展的に解消し資本金一億二千万円の「有明製鉄株式会社」（社長島村哲夫氏＝八幡製鉄専務）が創立された。いよいよスタートを切つたわけである。

砂鉄事業は蹉跌事業か（？）

県でもだまつて眺めているはずはない。寺本知事は島村社長から連絡があると、すぐ協力体制を決意した。県議会ともはかり「有明臨海工業地帯開発調査本部」を設置した。本部長は沢田副知事で調査費千五百万円。

年産百万トンの製鉄所がかりにできると関連産業をふくめ毎秒四トンの工業用水が必要といわれているが、その水はうまく手に入るかどうか、工場をつくる場合の地盤が堅いかどうかの地耐力調査などをはじめ、臨海工業地帯造成の必要条件を調べるためである。熊本大学の教授陣をはじめ各大学などの協力も求めて調査に万全を期した。一応工場敷地は宇土市住吉地区と玉名郡長洲町が候補地。いまのところでは六月中にも調査結果をまとめあげ〝結論〟を出し、七月中に青写真をつくる予定である。

年産百万トンを計画

蹉跌事業の定説だつたものが何故、救世主に早がわりしたのであろうか。それは有明海の場合、阿蘇山から流れこんだ砂鉄が袋状の湾内で十五万年分沈んでいる。沈んでいる砂鉄の層は一㍍以上もあるということだ。

近くに石炭（コークス）や煽石（石炭の一種）があり、燃料に不自由しない。住吉、長洲のいずれの地区にしても、緑川と菊池川があつて年間百万トン銑鋼の一貫工場ができても、全然水の不自由は起らない。ひと口にいえば立地条件がよいので、日本で最も安い建設費の製鉄所ができあがり、そのうえ、いちばん安い生産コストの製鉄所となるからである。

有明製鉄の計画

創立された有明製鉄は、さしあたり今年の末頃までにロータリーキルン一基をすえて、日産三千トンから四千トンていどの能力をもつことになるが、将来は埋蔵量次第では、年産十万トンの電気製錬工場や鋳物工場もつくり、年産八十五万トン～百万トンの大製鉄所までもつていく計画をもつている。

県の調査本部で出した「有明海の砂鉄開発と製鉄所の誘致について」というパンフレットにはこんな要旨の文句がある「砂鉄は昔からあつたが、砂鉄は蹉跌に通ずるということになつており、業界から敬遠されてきた。それがいまや救世主となつた」と……。

こうなると、排気ガスを利用する工場や、その他の関連産業も当然できることになるので、九州第二の製鉄コンビナート地帯となることはうけあいであろうと期待されている。

普通、砂鉄にはチタンをふくんでおり熔鉱炉ではクリンカーが発生するので、こんどは最新式のロータリーキルン法でやることになつたものである。

輸入礦と砂鉄

日本の製鉄業界は、産業の近代化にともなつて毎年伸びをみせ、年間二千二百万トンに達している。

日本鉄鋼連盟では政府の所得倍増計画とにらみあわせて、昭和四十五年度には需要粗鋼を四千八百万トンと推定しているほどで、こんどの鉄鋼需要はますます増大すること必至である。現在国内鉄資源の占める率は三十六％。そのうえ輸入原料の価格は変動が大きい。ある時期には輸入鉄鉱石は一トン当り四千数百円の高値であつた。これに比べ砂鉄の場合はせいぜい千数百円の安値でまかなえるので、有利さがうかがえるわけだ。

初めての人は夢のような話だと思われるかもしれないが、こうした有利な条件のもとに有明製鉄では、さらに将来の規模を ①阿蘇山の地熱利用の自家発電を計画し小国町で調査している ②四万トンの鉄礦石専用船岸壁や輸出センターの構想などを進めている…といわれ、実現したあかつきには、熊本県も農業県から工業県へのしつかりした跳躍台をもつことになること間違いないようだ。

小児マヒ問答

問 予防注射を全然していないが、いまからでもおそくないか？

答 おそいけれども、一回でも受ければ相当の効果はあります。早く保健所や役場にご相談下さい。

問 生ワクチンの副作用はないか？

答 別にないと云われています。

問 ソークワクチンを二回目までやつているが、その後三回目をせずに、生ワクチンを服用してもよいか？

答 ソークワクチンの三回目を受けて下さい。

問 生後三カ月位の乳児や六才以上の子供は注射しないでもよいか？

答 夏の流行期に六カ月以上になる乳児は注射を受けたがよいでしよう。六才以上の子供もおなじです。

問 大人は小児マヒにはかゝらないか？

答 過去に免疫ができていない人は、年令の如何をとわずかゝることがあります。

問 へんとうせんの手術や歯を抜くことは、いまはひかえたがよいということだが、なぜか？

答 口の中やのどの粘膜に傷があれば、病源体（ビールス）が侵入しやすいからです。

問 では予防対策如何？

答 ①予防接種をする。②ハエやアブラムシ等を駆除する。③体の抵抗力がおとろえないようにする……の三つにつきます。